



FDをアップデートする： 学習者中心×3層モデル×学生参画

教育推進部教授 山田 剛史

FDの変遷

～FDがどう捉えられ、実践されてきたか～

FDの変遷として、1998年の努力義務化から四半世紀、2008年の義務化(大学院は2007年)から15年が経ちました。「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究」と定義され、日本の高等教育を支える機能の1つとして古くから実践されてきました。特に、FDの登場から2000年代にかけては、授業アンケートを手がかりに個々の教員が自身の授業を改善する=FDという認識のもと、多くの実践がなされてきました。

2010年代に入り、高等教育の課題はより広がりを見せてきました。学習成果や質保証、3つのポリシー、教学マネジメントなど、教育全体をシステムとして捉え、組織的にアプローチしていく動きが強くなります。教育に対する見方も、教授者中心(教員が何を教えるか)から学習者中心(学生が何をできるようになるか)へと移行する必要性が高まってきます。従来のFDや教育観ではこの新たな動きに十分に対応することができなくなっています。

FDの定義

～新たな時代に対応したFDを～

この頃から各大学でFDを見直す動きが加速します。その考え方の1つがFDを授業(ミクロ)、カリキュラム(ミドル)、組織(マクロ)の3層に分けてアプローチするものです。個々の教員の授業の質向上が重要なことは言うまでもありませんが、その実現のためにもカリキュラムや組織の改善が必要であり、それらの相乗効果として教育全体の質向上が図られるという考え方です。本学においても、FDの定義について教育開発支援センターで検討を行い、以下のように定めました。

「建学の精神および教育理念のもと、学部・研究科等の教育目標を実現するために、個々の授業やカリキュラムの質向上、及び全学的な組織や学習・教育環境の整備等について、教職協働や学生参画により推進するとともに、継続的に検証を行い、さらなる改善に活かしていく活動」

この定義には4つのポイントが含まれています。1つ目は、ミクロ・ミドル・マクロの3層モデルで構成している点。2つ目は、教育・学習環境ではなく、学習・教育環境としている点。これは、上述した教授・学習観の転換を強調し、より重要なのは学生の学習環境を変えようという想いを込めています。3つ目は、教職協働や学生参画を含めている点。FDの拡張に伴い、教員だけでなく、職員との協働や学生の参画、すなわち大学に属する全ての人によって実現しようという想いを込めています。4つ目は、継続的な検証や改善に活かすという点。講演会や研修会などイベントの開催自体が目的ではないことを強調しています。

学生参画によるFD

～いま最も注目されるFDのカタチ～

学生参画によるFDはいま最も注目されています。欧州では高等教育の質保証の主要なアクターとして学生が位置づけられています。大学の主役は学生です。学生がよりよく学び、健やかに成長する場が大学であり、それを支え促すのが教職員の役割です。しかし、日本の高等教育機関における学生の扱いはお客様のものであり、せいぜいアンケートの対象者として扱われるのが現状です。第4期認証評価でも質保証プロセスにおける学生参画が議論の俎上に上がっていますが、「学修者本位の大学教育の実現」には不可欠であり、各大学で取り組むべき重要事項だと考えています。

筆者は昨年度、その可能性を模索するべく、CTLプロジェクト「内部質保証を支える IR/IEプロジェクト」の一環として「関大生の学びと成長加速プラットフォーム」を設置し、その中で3つの学生ユニットが活動を行いました(<http://yamatuyo.com/education.html>)。その内の1つのユニット「MOCA(Meet On Creative Academy)」が、『学生にとって「よりよい授業」に必要な5つの要素』なるレポート及びリーフレットを作成してくれました。学生の想いの籠もった読み応えあるレポートです。最後に、当該レポートを創ってくれたユニット代表学生の声を掲載します。



学習者のよりよい学びと成長のために

奥村 百香(京都大学大学院教育学研究科M1/文学部卒)

MOCAは「学生の学びについて学生自身が考え、行動にうつしたい」という想いのもと、他の学生や教職員との対話を大事にし、活動をしてきました。「学生参画によるFD」に近い取り組みであるように捉えています。学生は単なる大学教育のサービスの受け手ではなく、大学教育をよりよくしていくための重要なアクターです。「学習者中心の教育」を実現するためには、学びの中心にいる学生が自身の学びに責任をもつこと、そして教職員と学生の相互作用により、学習と教育をよりよいものに創り上げていくことが大切だと考えています。



大学史こぼれ話

まずはOxbridgeから

教育推進部教授 三浦 真琴

最古の大学がBologna大学(以下、大学を省略)であることを知っていても、CambridgeがOxfordから分かれて誕生したことを知る人は少ない。FDの意味を知っていても、それが英国のSDに端を発することを知る人も少ない。大学史を概観すると遠近に興味深い話を発見できる。歴史は一頁目から紐解くものだが、今回は英国の大学史を一部通覧しよう。

OxfordとCambridge両校出身のノーベル賞受賞者を合算すると世界一位のHarvardを優に凌ぐが、誕生当時から長らくは貴族や郷紳の子弟の訓練場であった。12世紀のOxford市には国王や大司教の寵愛を願う外国の学者が集い、その周囲に若い学徒が参集した。この共同体が後の大学の核となるのは、これに先ずるBologna、Parisと同様である。彼の地では英国、独国出身の若者も学徒となっていた。国王Henry IIと衝突した大司教Thomas Becketを仏国が擁護したことに激怒した国王は1167年に渡仏禁止令を出す。仏国留学不能となった若者と余儀なく帰国させられた英国学徒はOxford市に流入して先の共同体を拡大させ、新たな大学Oxfordが誕生する。1209年、「タウンとガウンの争い」が発生し、町の人々と対立した学徒と学者がCambridge市へと移住し、ここに英国第二の大学Cambridgeが生まれる。英国には6世紀以上に亘って偶然に作られた二校の大学だけが存在したのだ。

19世紀にDurham、Londonなど4校が、20世紀前半に「赤レンガ大学」6校が設立され、校数はようやく二桁に至る。第二次世界大戦まで大学は少数の知的・社会的エリートを輩出する教育機関であり、その質が取り沙汰されることは殆どなかった。1960年代に「板ガラス大学」20校が新設された頃から状況が変わる。大学増設に大学教員養成が追い付かず、従来なら教壇に立つことのない人間が教鞭を執ることになった。ここに教育の質の低下を克服するべくSDが登場した。このSDがアメリカでFDと名を変えるのだが、その前にアメリカの大学に影響を及ぼしたドイツの大学を通覧しておかなければならない(次号に続く)。

ChatGPTとは？
教育に効果的に活用する方法は？

教育推進部教授 岩崎 千晶

2022年11月にChatGPT3.0が公開され、言語生成系AI(以下生成系AI)によって文章の自動作成が容易になりました。その後、Bing、Bird等の生成系AI、また画像を生成するAIも公開されました。ChatGPTをはじめとした生成系AIはテキストをベースとした人口知能で、利用者の指示に基づき様々な形式の文章を自動作成します。教育現場での活用に関しては、ChatGPTを活用することで、文章力の向上や、学習活動の振り返りに活用できるという効果が認識されています。ChatGPTを開発したOpenAI社のWEBサイトには、「教員の発言や資料を見て不明点について確認することで個別学習が深まる」「学習プランの下書きやブレインストーミングなどの活動(グループワークの議論など)に活用できる」「クイズ問題などの演習問題の設計(クイズ問題を作成して自主学習に利用する)」「ライティングの一部について、文法的または構造的なフィードバックを提供する」「文章を書くのが苦手、英語が第二言語である学習者がスペルミス減らす」等の教育的利用が提示されています(OpenAI 2023)。その一方で、学生の顔と名前が一致しない状況においてレポート課題を提示した場合、ChatGPTが生成した文章をそのまま提示されるのではないかと懸念の声が挙げられています。しかし、ChatGPTによる教育的な効果が指摘されていることや、社会ではChatGPTを利用して業務を効率化させる動きがあることから、大学での効果的な利用を検討する必要があるのではないのでしょうか。今後、教育職員が協力し合い、どのような活用により学生の学びが深まるのかについて議論をしていく必要があります。

教育開発支援センターでは6月14日に初心者向けにChatGPTの登録を行うところから始めるハンズオンセミナー「言語生成系AIについて学び、実際に使ってみよう!」を開催しました。また同月24日



FDフォーラム、トークセッションの様子

に、第29回FDフォーラム「高等教育におけるChatGPTの教育的利用を考える」を実施しました。吉田墨准教授(東京大学大学院工学系研究科)、田村祐准教授(関西大学外国語学部)によるChatGPTを活用した教育的利用に関する講演を実施し、その後、トークセッションを行いました。400名を超える参加者があり、アンケート結果も概ね好評でした。当日の動画(学内限定公開)や資料は教育開発支援センターのWebサイトに掲載しています。ぜひご覧ください!

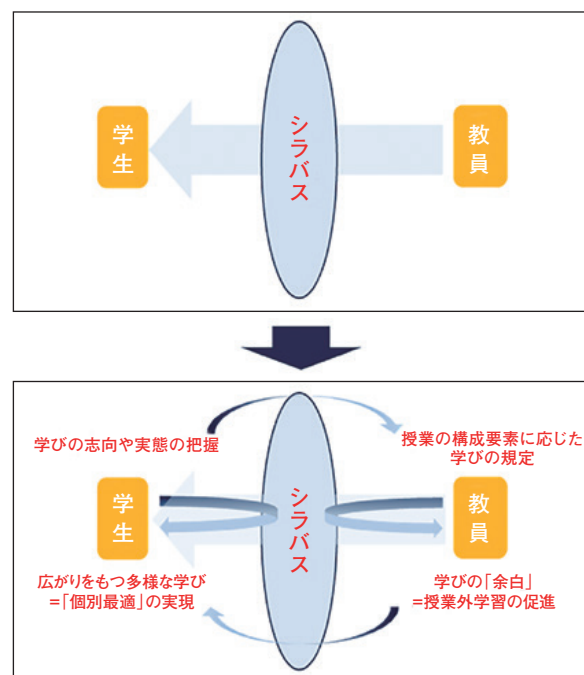


学習者中心の教育の視点からみたシラバス

教育推進部准教授 山田 嘉徳

シラバスは、授業概要や目標、評価方法、必要な教材などの基本的情報を把握し、学生の効果的な学習を導く役割を果たすとされます。しかし実際の学生の学びは、シラバスに明示された内容には限定されず、はるかに広いひろがりをもちます。学びは本来的に多様なものだとする見方を念頭におきながら、シラバスが活用されるあり方を検討することが重要になるといえます。それでは豊かな学びを導くツールとしてシラバスがうまく機能するあり方を探るためには、どのような視点が求められるのでしょうか。学習者中心の教育の考え方に立てば、一つは学生の学びの実態や志向に配慮する視点です。たとえば学生が最も注目する項目である「評価方法」においては、授業の構成要素の重要性に応じて、目標に照らした評価の観点や比率が妥当なかたちで決められているかどうかは、さらに追求されていくべきでしょう。学生の自己成長や深い理解には形成的かつ公平な評価が不可欠であり、そうした学びを下支えする学習・教育環境の中に、シラバスが有効なツールとして埋め込まれていくことが期待されます。いま一つは、シラバスに示された個別の科目に関わるトピックにとどまらず、学び手にとってまだ先にやるべきことがあるとする「余白」を予感させる工夫が求められるといえるかもしれません。この視点は今日、追加の学習機会や資料を探究させることが重要だとする、授業外学習を促す役割として指摘されてきた

ことと関連する視点です。社会の急激な変化に伴い多様化する「個別最適な学び」が期待される中で、シラバスに求められる役割を改めて問い、学生の成長・発達を促す学習者中心の教育のあり方を検討することがますます重要になると考えられます。



学習者中心の視点から見たシラバスに期待される役割

卒業生寄稿

”知りたい”の先に…

江口 敦子 (2022年度社会学研究科卒)

私は学生生活において、問いを発見し、それを探求する好奇心が、課題を解決し、アイデアを生み出す原動力になることを学んだ。学びの第一歩は自分の関心のある分野の先行研究にあたることから始まる。これまでに何が解決され、何が未解明なのかを知り、それを元に問いを立てることで、新たな調査を始めることができる。まさに温故知新である。大学院で学んだのは、これまで多くの研究者が築いてきた礎の上に新しい学びが始まることであった。

好奇心こそが学生の能動的かつ主体的な行動のエネルギーになる。教育開発支援センターでは学生がアクティブラーニングを実践するために様々な働きかけを行っている。私はLAやTAとして学生の学びをサポートする活動に携わり、自らの学びを学生にどのように反映できるかを試行錯誤した。主に課題解決型授業のグループワークのファシリテーターとして、学

生に課題設定をさせ、解決策を導くための議論のサポートをしたり、時には一緒に頭を悩ませたりした。この時、大切にしたのは、学生の知りたい、やってみたいという好奇心を引き出すことである。

議論が滞ったり、支援を必要としたりするグループがあれば「なぜそう思うのか」「明らかになっていないのは何なのか」と色々な角度から質問を投げかけた。学生は私の問いに答えるために、自ら情報を収集し、思いを巡らせ始める。その思考が時に斬新なアイデアを生む。物事や人の考えの背景を知ろうとする意識は、学生生活において育まれるものだ。きっとこれからも「知りたい」という好奇心と情熱が大学における学びを支えていくはずだ。大学生活で培ったものが、これからの社会人生活で力を発揮する場面がきっと訪れるはずだ。

CTL 掲示板

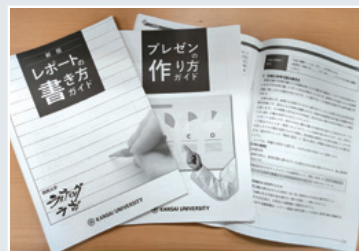
ライティングラボが提供している教材のご紹介(e-Learning・各種冊子)

ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 大西 洋

ライティングラボでは、学生に個別に実施している文章作成の個別相談や、昼休みに実施しているワンポイント講座、先生方からのご依頼をいただいて行う出張講義以外にも、各種の教材を作成して学生や教員の皆さんを支援しています。

関大LMSでは、学生生活に役立つe-Learningコンテンツを提供しています。レポートを作成するときの心構えから、レポートの特徴、序論・本論・結論の書き方、引用の方法、文章表現、文献の読解などに関する、1つ数分程度のレッスンを29個用意しており、動画・スライド・クイズなどを交えて学ぶことができます。また、実施済のワンポイント

講座の動画や、『レポートの書き方ガイド』『プレゼンの作り方ガイド』のPDF版なども、同コースで利用できます。関大に所属する方は誰でも登録できますので、関大LMSの「コースの追加」から「【2023年度生】ライティング



力を高めて、いいレポート・卒論を書こう！」を追加してご利用ください。また、冊子体の『レポートの書き方ガイド』『プレゼンの作り方ガイド』も作成しています。ガイド冊子を担当科目の履修学生に配付することを希望の先生は、「1.お名前・2.ご所属・3.種類ごとの部数・4.受取方法（学内便での送付か教育開発支援センターでの受け取り）・5.受取希望日」を、下記URLの問い合わせフォームへご連絡ください。

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/contact/>



ライティングラボがアクティブラーニング型のワンポイント講座を実施しました

教育推進部特別任用助教 張 曉紅

ライティングラボでは、春学期にアクティブラーニング型のワンポイント講座（アカデミックスキルコース10回、実験・調査コース4回）を実施しました。講座では、受講生のライティングに関する知識の理解（例えば、文献調査の必要性）とスキルの応用（例えば、文献の調査と検討）を目指しました。

受講後のアンケート調査結果によると、140名回答者のうち、知識の理解に関する項目に対しては95.7%の受講生はポジティブな回答を選びました。その一方、「知識やスキルを活用し、ワークを通して課題を達成できましたか」という問いには、受講生の73.6%が「そう思う」「ややそう思う」、25%が「どちらともいえない」と回答しました。

今回の講座で扱った知識やスキルを理解できましたか



■ そう思う ■ ややそう思う
■ どちらともいえない ■ 余りそう思わない
■ そう思わない ■ 未回答

講座で扱った知識やスキルを活用し、ワークで課題を達成できましたか



■ そう思う ■ ややそう思う
■ どちらともいえない ■ 余りそう思わない
■ そう思わない ■ 未回答

教育推進部 教員の活躍

- 山田嘉徳准教授が第18回大学教育学会奨励賞を受賞しました。対象論文は、山田嘉徳、関田一彦著『研究論文』「授業改善に向かう大学教員の授業観・教育観の検討—学習者中心の教育の視点から—」(大学教育学会誌第42巻第2号)です。
- 張 曉紅特別任用助教がTEAと質的探究学会に投稿した国際論文「『思考力の重要性』という促進的記号の作用に注目—中国人教師の信念の内化と外化を描くTLMG—」が『カタログTEA (複線径路等至性アプローチ)—図で響きあう』(新曜社、2023)に掲載されました。

● 記事テーマ募集

読みたい、知りたいテーマなど、ご意見をお寄せください。
編集事務局 ctl-staff@ml.kandai.jp 宛、タイトル【CTL ニュースレター記事テーマ】と明記

● 活動報告はホームページをご覧ください

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

● お知らせ

今号より、教育開発支援センターが掲げる「教育の質向上と発展」のために、大学をより面白く感じる読み物へ内容を刷新します。「大学」を知って、「大学」に参加する、そんな場になれば幸いです。



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター CTL Newsletter

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 MAIL: ctl-staff@ml.kandai.jp
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

発行日/2023年8月4日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター